月刊 中東レポート

第 64 号

発行　ウニタ書舗
東京都千代田区神田神保町1-52
TEL. (03)291—5533
編集　J.R.A.
郵便振替　東京1—48443
三菱銀行神保町支店　当座9012656
会員制　年会費24000円

オペレーション・デザート・ストーム

一九九一年一月一八日

軍事物量による恫喝によってイラクを屈伏させることができなかった米帝は、国連の期限切れを待ち、一七日未明、オペレーション・デザート・ストームなるイラク攻撃に踏み切った。緒戦では、米帝率いる多国籍軍の圧倒的な空軍力の優勢が発表されたが、現時点で、多国籍軍の発表はしどろもどろになってきた。

多国籍軍が制空権をおさえたのは確かだが、イラクの側は主戦力に大きな打撃を受けていないばかりか、予告した通りに、イスラエルへのミサイル攻撃で反撃を開始した。また、空爆で破壊したと豪語した空軍力やミサイル基地などは、「どうも、おとりの偽物だったらしい」とか、「早期決戦にはなりそうもない」ことを、米国防長官が認めざるをえなくなっている。荘重な口調で、「クウェートの解放」のための戦争を打ち出したブッシュも、苛立ちを隠せないようになってきた。どこに米帝の誤算があり、今後、どのように発展するのか？

今号は、イラク対米帝の戦争に焦点をあてて、報告したい。

一　戦況

(1)開戦前夜

米帝は、イラクへの武力行使のおすみつきを国連で作って以来、一月一五日のクウェートからの撤退期限切れに向け、「軍事解決」を準備しつつ、「政治解決」を軸に展開しようとした。「政治的解決」の名のもとに、「直接交渉者」という代弁者の役割を演じ、実質はイラクへの一方的な譲歩を要求する「非妥協」さを示すことで、帝国主義の権益を擁護する「憲兵」としての威信を示そうとした。

「新秩序」に向けた米帝の権威作りのために、あくまでも米帝のイニシアチブの下に、「直接交渉」という形態をとり、「世界の代弁者」の役割を演じようとした。九日に行われたジュネーブでのベーカーアジス外相会談で、米帝は、こわば最後通牒で交渉ではないとしていたが、この外相会談で、ベーカーが何度もブッシュと電話で協議したことに見られるように、イラク側からの何らかの譲歩を期待していたことは、間違いがない。しかし、イラクは、この会議においても、ブッシュの親書を突き返すなど、米

目次

オペレーション・デザート・ストーム……1
資料……10
・統一指導部アピール（全訳）
①　アピール65号
②　アピール66号
重要日誌（一九九〇年一二月一一日～一九九一年一月一八日）……15
編集後記……16

帝の要求に妥協しない態度を示した。この「直接交渉」が決裂し、戦争は必須になったが、ブッシュは、国連総長をイラクに派遣し、イラク側の妥協を国連の名の下で行わせようとした。

一二日に行われた国連事務総長とフセイン大統領との直接会談も、事前の事務総長―ブッシュ会談で、一切の譲歩や新提案を阻止していた。国連総長という国際的合法性を利用して譲歩させようというものであった。しかし、これに対しても、イラク側は、一切の妥協を拒否した。

さらに、一五日深夜まで継続された国連安保理では、帝国主義側から出された唯一の妥協の可能性を残していた仏案を、英と協力して潰し、自ら米帝主導以外の「政治解決」を一切拒否することで、最終的に戦争への道を選択していったのである。

国内的には、「政治解決」をあくまで追求する形態を取りつつ、国内の「武力行使止むなし」との世論操作を積極的に行い、イラクの非妥協を口実にして、米上下両院から国連安保理決議六七八実行の支持を取りつけた。

また、仏帝との矛盾を抱えつつ、基本的なNATO同盟の結束化を重視し、特に、NATO加盟国として唯一イラクの隣接国であるトルコからの米軍の基地出動の承認と、NATO空軍機動部隊四二機の派遣の中に独部隊の参加を実現させた。

そして、アラブ諸国の分断をさらに強化するものとして、特に、シリアとエジプトに対して、戦争時の参戦を迫った。しかし、これは、イラクへの攻撃には参加しないという両国の立場を崩すことにはならず、米帝の決定的な策動は拒否された。

一方、イラクの側は、「人質の釈放」や「仏案の評価」という形で、柔軟さを示しつつ、実質的には、クウェートの確保とパレスチナ問題とのリンクというイラクの条件を断固として譲らなかった。

一四日に非常召集されたイラク国民議会は、米帝の恫喝に屈しないことを決定し、「攻撃されたら、まず、イスラエルを攻撃する」「攻撃を受けたら、世界中のモスレムは、欧米の権益を攻撃せよ」との声明を国会議長が発表した。また、バグダッドで開催された戦闘的モスレムの国際会議（中東のみならず、欧米からもモスレムが参加）では、フセイン大統領は、「この戦争は、信者と不信者との戦争、善と悪との戦争になる。モスレムが勝利するだろう」と演説し、同国際会議は「ガルフ戦争開戦時には、イラクへの侵略に加担する欧米諸国の権益を、世界中で攻撃しよう」との声明を発した。これは、九日にメッカで開催されたサウジ主催のモスレム会議への挑戦でもあった。

米帝、イラクの非妥協な態度から、戦争の危機が高まるなかで、アラブ諸国の戦争回避努力は、国連の期限切れの直前まで精力的になされ、開戦になってからも、継続されている。最初に、一二月中旬に、アルジェリア大統領が中東関係諸国歴訪を行った。次に、一月の一二日から、「イラク人民と世界人民を破壊と災害から救うための最後の努力」として、リビアのジャルード中佐がイラク、ヨルダン、イランを歴訪した。また、ヨルダンのフセイン国王も、最後まで、政治的解決にむけ、戦争を仕掛けることへの警告を発し続けた。

その前段では、一月二日に、リビアのミスラタで、カダフィ大佐、アサド大統領、ムバラク大統領、バシール大統領（スーダン）が会談し、戦争回避のためのイラク撤退を要求していた。これまで、イラクの反米の立場を支持してきたリビアも、この段階で撤退を要求する流れに参加し、戦争を回避することを第一にしたように見えた。

イラクが譲歩しないことが、中東全域を戦争に巻き込みかねないことへの懸念が深まっていった。そして、国連の撤退期限切れが近づくにつれ、戦争になったらどうするのかを打ち出さざるをえなくなった。

エジプトは、イラク軍は空軍のカバーなく闘いたがらないだろうとの見方をとった。だが、ヨルダンのフセイン国王は、対照的な見方を示した。一二日の段階で、米のCNNとのTV記者会見で、米帝率いる多国籍軍によるイラク攻撃はアラブ世界に大災害をもたらし、将来の米―アラブ世界の関係を損なうだろうと、予測した。「途方もない打撃を与えるということでは、米の力と権力について論争を挑むものはいないが、この戦争の場合、アラブ全体の人民にそうした打撃が加えられることになり、その結末は巨大である。……力を使えば、初期の戦果を上げる

ことは可能だろうが、我々は、長い年月にわたる破滅的な状態に突入することになる。人々は、自らの能力の最善を尽くして領土を防衛するだろうし、人々は、この点では、極限的な決心を固めている」とした。そして、米帝に対して、「ある戦闘で勝利を収めたとしても、アラブ世界総体を失うことを意味する」と警告した。

また、イラク支持の立場にあったイエメンも、一二日には、突然外相をカイロに派遣して、ムバラク大統領との調整を行った。そして、同外相は、「我々は、イラクのクウェートからの撤退を一貫して支持してきたし、現在も、そう主張するのを躊躇しない」との談話を発表した。

そして、反植民地主義の立場から、米軍の撤退を要求してきたアルジェリアも、ベン・ジャジード大統領がシリアへの二日間の公式訪問を終了した一二月一六日に、共同声明で、イラクに撤退を呼びかけた。公然としたイラク支持をおろさなかったのは、PLOだけとなった。

こうしたアラブ諸国の政治解決の努力は、クウェートからのイラクの撤退を第一にして、多国籍軍の撤退を実現していく基本方向として形成された。特に、シリアのアサド大統領は、勇気は撤退することで、アラブの破滅を救えるのはサッダムの決断という主旨の呼びかけを行ったが、フセイン大統領は、逆に、米帝に対して闘うことを呼びかけ、政治解決を拒否していった。

開戦前段の特徴は、第一に、米帝は、NATO一三ヵ国―非NATO二ヵ国を軸にした多国籍軍に加え、アラブ同盟軍八ヵ国と他の四ヵ国を加えた計二七ヵ国六八万人という軍事物量力と、さらに、国際的圧力の前に、イラクは妥協し、クウェートからの撤退に踏み切ると見ていたことである。キューバ危機が最後の段階で回避されたように、このガルフ危機も戦争直前に回避されることを期待していたのだが、イラクの非妥協さによって、まったくの誤算となった。第二に、イラクの非妥協さである。これは、クウェート併合が死活問題としてあること、さらに、反米・反Zという立場によってアラブ人民レベルの支持を受けていることを背景としている。そして、アラブ総体を戦争に巻き込んでいくことが、アラブの力を米帝、イスラエルに向けることによって戦争に勝利する道であると考えていたこと、それが、イスラエルへの攻撃に現われている。

第三に、米帝は米帝主導の「政治的解決」を第一として、「戦争」回避を狙っていたが、イラクの非妥協さから、結局は、止むなく戦争に踏み切る構造となっていることである。

(2)開戦後

一六日夜中、米帝軍を中心にした多国籍軍が、イラク攻撃を開始した。これは、事前に米帝が発表していた軍事戦術展開の内容であった。それは、地上戦による米帝軍側の被害を最小限に食い止めるために、爆撃を軸としたものである。だが、軍事的には、「短期決戦」というには、軍事展開としても成立しえない戦術を選択した開戦となった。開戦時の米帝の誤算がここに示されていた。

まず、クルーズ・ミサイル一〇〇発とステルス戦闘機で、イラクの防空システムを破壊した後、米、英、サウジ、クウェート四ヵ国の空軍、海軍の爆撃機が空爆に入った。この日の第二回の攻撃派には、仏も参戦し、クウェートを爆撃した。

一六日の米国防総省発表では、「開戦三時間で、六〇の標的に対して、四〇〇回の攻撃を加えた。総計一万八〇〇〇トンの爆薬を投下した」。これは、ヒロシマに投下された原爆に相当する。また、米国防長官チェイニーは、「空爆をしばらく続行する。イラクからの反撃の報告はない。大統領の指令を受け、火曜日午後に『決行命令』に署名した。米国議会にも通告し、すべての解決策が失敗するまで、作戦開始を控えた。……サッダム・フセイン大統領の攻撃的軍事能力を除去するのが目的である」と、同日夜の記者会見で語った。

ブッシュは、チェイニーの記者会見後、ホワイト・ハウスで、一二分間の記者会見を行い、「クウェートの解放」のため戦争であるとか、「これは、第二のベトナム戦争にはしない」ことを強調した。

そして、サウジは、一七日に最初の声明を発表し、「クウェート解放」に向け、ガルフ危機を平和的に解決するすべての努力をサッダム・フセイン大統領が拒否したので、軍事作戦に踏み切ったとの立場を示した。亡命クウェート政

府も、「祖国を野蛮なイラクの侵略から解放する我々の正義の闘いの運命的、決定的な日々を迎えている。……世界は、正義と権利の勝利と、虚偽と侵略の敗北という最終的な歴史の瞬間を迎えている」との皇太子の声明を同日に発表した。

空爆を受けたイラクの側は、サッダム・フセイン大統領が、即、バグダッド市内を視察して回り、ラジオで、「ブッシュの犯罪行為によって、戦争が始まった。米の占領を許さず、屈伏しない」との意志を表明した。BBCの特派員は、フセイン大統領の口調が「怒りに燃え挑戦的なものだった」と、報道した。同盟軍側は、大本営発表しかないのに比べ、イラクは、BBC、CNNなど外国特派員の報道を許可しており、「バグダッドでは、何も変わったことがないが」「ホテルの窓からクルーズが巡行していくのを目撃した」との報告が世界中で電波にのった。

開戦から二日間は、多国籍軍がイラクの制空権を握ったばかりか、イラクの反撃能力をも奪ったかのような報道が米帝、英帝から流された。そして、ソ連も、大統領官邸は、瓦礫の山と化したことを確認した。

イラクは、敵が猛爆撃にでている時に、沈黙を守った。これは、軍事的には、圧倒的な物量の米帝と闘い、長期戦化を計る上では当然の展開であり、この時点で即軍事対峙に出る方が自壊を早める。

イラクは、開戦前に宣言した通り、イスラエルのテルアビブとハイファにスカッド・ミサイルを撃ち込み、反撃した。だが、化学兵器の使用には訴えなかった。防空体制を撃破し制空権を奪ったのは連合軍であったが、イラクの側は、おとりを駆使して、戦略的戦力を保存するのに成功したことが明らかになった。一日五億ドルと米帝が発表した戦費を「おとり」の破壊に費やしたことを、米帝も英帝も認めざるをえなくなった。

米帝は、国務省、ペンタゴン代表団を派遣してイスラエルが参戦するのを必死で押さえる一方、パトリオット・ミサイルを急遽供与して、防衛に直接乗り出さざるをえなくなった。

こうした米帝の対イスラエル政策は、第一に、イスラエルの報復攻撃、参戦が、アラブ同盟軍および親米国が、反米・反イスラエルで結束して、米帝の立場を失うことになるのを最も恐れたからである。第二に、イスラエルの参戦は、戦火の拡大を導き、それは、イラクの意図でもある。そうなれば、軍事的にも長期戦化を導き、米帝の主導権を失う展開も想定されたからである。

緒戦で破壊したはずのスカッド・ミサイルの移動式、並びに固定式発射台が健全であることが示され、ペンタゴンは、最初の大本営発表を訂正しはじめた。当初の分析でも、イラクの空軍力を破壊し尽くし、連合軍に安全な地上戦にもちこむには、少なくとも二週間の空爆でイラクの戦力を弱体化させる必要があるとの見方が強かったにもかかわらず、反撃を受けないことを根拠に、あたかも第一戦での勝利を収めたかのような楽観的観測に米帝は落ち込んでいた。

逆にイラクは、イスラエル、サウジへのミサイル攻撃を継続し、世界で比類無きと豪語する米帝軍に対峙している。そして、イスラエルへの化学兵器使用には出ていない。イスラエルを巻き込むのを一定押さえる意図でイスラエルへの攻撃を続けているのか、化学兵器搭載の技術を持っていないのかは、不明である。前者の場合であれば、イスラエルが動けば、アラブ側の統一的対応が困難になるとの判断によるものと思われる。イスラエル、多国籍軍との長期的な戦争に持ち込もうとしている。

イラクは、地上戦でも、サウジ－クウェート国境に石油濠、地雷源、戦車ライン、歩兵ラインという四重の防衛線を敷き、イラク最強といわれる大統領護衛隊をクウェート内、イラク南部に配備している。また、クウェートの油田等の石油施設には地雷を仕掛けてあり、いつでも、爆破できるという。そして、クウェートの海上には、石油を満載したタンカーを並べ、反イラク軍の海兵隊上陸作戦の折りには、まず、火の海にする戦術とされている。

緒戦における特徴は、第一に、米帝の軍事展開、爆撃を中心とした戦略、軍事拠点の破壊を中心に置いた。これは、ベトナム侵略での米帝の教訓として、米兵の死傷者の増大が反戦の拡大につながり、泥沼化したことが、自己規制となり、それが短期決戦の軍事手段を取れないものとなっていること。特に、イラクがイスラエルとサウジへの化学兵器による攻撃を公然と宣言しているために、イラクの防空システムの破壊を第一に置かざるをえなかった。

第二に、制空権を取ることは重要ではあるが、戦争の勝敗の決定的要因ではないことを示し、地上戦による決着に向かわざるをえない構造となっていること。

第三に、イラクは戦力を極力温存し、敵の猛爆撃に対しては、イスラエル、サウジへのミサイル攻撃によって（軍事的ダメージを与えているわけではないが）、戦術的に対峙構造を作ることで対抗し、地上戦に向けた準備体制をひいていること。イラクは、八年間にわたる戦闘の経験を持っており、そのイラクを、近代兵器で装備はしているものの砂漠での戦争の経験がない米軍などが破壊できるかは不明である。

以上の要素が、長期戦の可能性を示しているといえる。

イラクは、制空権は取られているが、地上戦においては、未だ戦力を温存している。地上戦においても、一挙的な戦力の消耗戦を押さえつつ、多国籍軍との長期的な戦争に持ちこもうとするだろう。圧倒的な物量で、勝敗を一挙に決しようとする米帝に、ベトナム戦争の泥沼が待ち受けていることになりかねない。米議会が、ブッシュ支持にでたのも、短期決戦で勝敗を決する可能性に賭けたからである。

二日間でイラクに打ち込んだクルーズ・ミサイルは二〇〇発で、それだけで二億六〇〇〇万ドルである。それだけ見ても、長期戦化すれば、膨大な戦費が必要となり、他の帝国主義に出させたとしても、不況に入っている米経済の圧倒的な負担は避けられない。

長期戦－戦死者の増加は、まず、米国内のブッシュ支持が批判に転化するだろう。すでに、「石油のための戦争反対」という反戦の声が上がっており、開戦の直後から、米国内、欧州各地で、反戦、停戦の要求が高まっている。宗教者も、反戦の流れを強めていくだろう。いかに、「クウェートの解放」とブッシュが御旗をかかげようと、石油権益の確保のためであることは、誰の目にも明確である。

また、連合軍諸国内でも、戦争の長期化による矛盾は悪化せざるをえない。欧米の石油独占のために、生命を失い、税金を絞り取られることへの反発、拒否が激化するのは時間の問題であろう。

二　アラブの反応

アラブの民衆は、ラジオにかじりつき、テレビに見入って、動向を見守っている。イラク政府の立場がどうであれ、人民レベルでは、これだけの軍事圧力をはねのけ、米帝相手に「一〇年戦争でもやる」とするフセイン大統領への支持を表明している。米帝率いる多国籍軍の空爆をかわし、あたかも反撃力がないのかと敵を油断させ一矢を報いたイラクの戦術は、ますますアラブ民衆をひきつけている。

アラブ国家レベルでの戦争回避の動きとは逆に、開戦直後から、アラブ諸国では、イスラム原理主義潮流を含めて、イラク支持デモ、義勇兵派遣の要求、国会でのイラク支持決議などが高まる一方である。アラブ各国の人民の反響を簡単に見てみると、以下のようになる。

まず、PLOは、米帝に対する攻撃を呼びかけ、モスレム、第三世界諸国、そして世界の平和愛好勢力に対して、反米を呼びかけている。イスラエルが第一回のスカッド・ミサイル攻撃を受けた一八日には、「イスラエルは事実上、交戦状態に入った」と規定した。

被占領地では、断固イラク支持である。それは、イラクがパレスチナ問題をガルフ問題をリンクさせる解決方式を提案していることへの支持である。これは、統一指導部のアピールにも現われているが、変化した世界の構造のなかで、ガルフ危機から経済的打撃を受け、イスラエルがガルフ危機の最大の受益者となっていることなどへの危機感としてもある。国連の期限切れの直前、ファタハの保安長官的位置にあったアブ・イヤドとその副官格などが暗殺され、打撃を受けている。被占領地は、開戦以来、厳しい封鎖と外出禁止令の下に置かれ、イラク支持の闘いが封じ込められた感がある。彼らにとって、イラクが実際にテルアビブ、ハイファなどをミサイル攻撃したことは、反イスラエル・反占領の闘いに弾みをつけるものとなるだろう。被占領地では、ガルフ戦争のどさくさに紛れて、イスラエルがパレスチナ人の大量追放政策に出るのではないかと見る人も多い。だが、こうした封鎖政策は、いつまでも取れるものではなく、

米帝のイラク攻撃が長期化すればするほど、困難になるだろう。

ヨルダンは、大変困難な立場におかれている。イスラエルと国境を接している地理的位置に加え、政権の性格としては親米国でありながら、国民の多数はパレスチナ人であり、米の親イスラエル政策を憎悪している。また、イラクとの関係を軸に展開してきたことから、イラクへの経済制裁に参加したにもかかわらず、エジプトとは違って、援助は大幅に規制されている。ガルフから追放されたヨルダン人、パレスチナ人労働者の大量帰国から、海外からの送金が途絶え、経済危機にみまわれている。国連の撤退期限切れの直前には、ヨルダン首相はシリアを訪問し、イスラエルに攻撃された場合のシリアからの援軍を期待した。イスラエルが空爆による対イラク反撃を行えば、ヨルダン領空を通過するだろう。それを許せば、国民とアラブ人民から裏切り者として非難されるばかりか、王制の存亡の危機につながるのは必須である。また、イスラエル機に攻撃すれば、イスラエルとの直接の戦争状態になる。これも、ヨルダンは避けたいところである。

また、開戦初日、ヨルダン議会は、緊急会議を開いてイラク支持決議を採択したし、アンマン市内では、エジプト大使が投石された。また、ヨルダンのモスレム同志会は、新聞に「すべての場所で米権益を攻撃するのは、全モスレムの義務である」との広告を掲載して、反米の立場を打ち出した。それに対して、ヨルダン政府は、同志会リーダーを逮捕した。そうした複雑な位置にあるのを理解して、フセイン国王は、アラブ民族主義の立場を打ち出して、微妙なバランスを保っている。

イスラエルに南部を占領されているレバノンでは、あちこちで数千人規模のイラク支持デモが起こっている。ベイルートのアメリカン大学構内でも、反米デモが数百人の学生によってくりひろげられた。南部では、ガルフ戦争の焦点化に乗じて、イスラエルが攻撃してくる危険性に対して、厳戒体制に入っている。パレスチナ解放勢力は、直接的には、反イスラエル闘争がイスラエルの侵略を引き出す挑発となる可能性を考慮して、現在的には厳戒体制にとどめ、イスラエルが攻撃してくれば反撃する体制を整えている。

また、タイフ合意に基づいて一定進行してきた安定化の流れも、三〇人の閣僚を任命して新カラミ政権が成立したが、キリスト教徒右派は、ガルフ情勢に乗じて、より大きな閣僚代表権を要求して、閣議をボイコットしている。また、ドルーズも、ジョンブラットも、「一時的に、政界から身を引く」と宣言して、事実上のボイコットに出た。政治的安定化の過程が、戦争の勃発を機に、一時的にも流動化しそうである。

シリアは、アサド大統領のフセイン大統領への呼びかけにも示されるように、最後まで戦争回避の努力を続ける一方、イラク攻撃には参加しないとの当初の立場を貫いた。そして、開戦後には、「イラクがクウェートから撤退後、攻撃を受けることがあれば、イラクと共に闘う」との立場を打ち出した。だが、あくまで、戦争の責任はイラクの頑強な態度にありとして、現在では、「イスラエルをミサイル攻撃したが、これは、見せ物的なもので、アラブ民族総体を危険に陥れるもの」と批判している。

このようなシリアの立場の基本は、戦争が始まった現在、イスラエルとの軍事均衡と戦争体制ができ上がっていない以上、戦争に巻き込まれるのを回避することを第一とすることにある。シリアは、クウェートからのイラク軍の撤退をアラブ諸国政府のコンセンサスとして作り出したが、これは、アラブ民衆の民族主義的な感情との矛盾を作り出す構造となっている。アラブのなかでは、最も安定した政治状況にあると言われているが、軍事的には臨戦体制を取っている。

エジプトでは、公式には反米デモ、イラク支持デモは行われていないが、これは、政府が先行的に学校を休みにしたからであると見られている。イスラエルがミサイル攻撃を受けた直後、米国務省が駐米エジプト、シリア大使を招請して、態度を打診した時、エジプトは、同盟軍としての立場に変化はないことを明確にした。すでに、エジプトのモスレム同志会の指導者が、反米闘争を呼びかけている。ムバラクは、イラクのイスラエルへのミサイル攻撃を意味のないものと批判し、反動的な位置から戦争に巻き込まれるのを回避する立場を取っている。米帝は二〇億ドルにのぼるエジプトの対米軍事負債を帳消しにしたが、エジプト人民に利益が還元されるものではなく、戦争が長期化すれば、国内矛盾の反映として、人民のイラク支持は強まっていかざるをえないだろう。

アルジェリアでは、政府に義勇兵派遣の要求を掲げ、モスレム原理主義者を中心に数十万のデモが大統領府を取り囲んだ。政府は、インドなどと協力して、国連での停戦決議を作るべく、非同盟諸国などを説得しているが、人民の側は、イラク支援に志願している。

リビアでも、反米のデモがまきおこっている。イランは、米帝の介入に警戒しつつ、イラク国境での演習を展開している。他のイスラム諸国でも、モーリタニアでは、仏人一五〇〇人と伊人三〇〇人が仏大使館構内に避難し、数千人のモスレムがそこを抗議デモで取り囲んだ。イエメンでは、首都のサナーで、開戦第一日目に、一〇万のデモ隊がイラク支持、米弾劾を掲げて、米、英、エジプト、シリア大使館を取り囲んだ。一五日の国連の期限切れの当日にも、すでに七万人がイラクに対してイスラエルを攻撃せよとの要求を掲げて、デモをした。イエメンは、隣国のサウジがイエメンのイラク支持を理由に数十万の労働者を追放したので、経済危機に見舞われているので、とりわけ、サウジに対する憎悪を高めている。

全体として、アラブの民衆レベルでは、フセイン大統領支持はいっそう強まった。石油の富を独占してきた王族に一撃を与え、帝国主義の総力をかけた軍事圧力に断固抵抗し、一切屈しなかったことが、反米・反植民地主義の立場にある民衆の支持をとりつける主要因となっている。

そして、米帝への憎悪はいっそう高まっている。米帝が、「クウェートの解放」を掲げれば掲げるほど、「サウジの防衛」を掲げれば掲げるほど、「イスラエルの防衛」にも乗り出してくればくるほど、米帝はアラブ民族総体の敵としての姿を浮き彫りにしている。サウジ、UAEなどのガルフ王制への反感と侮蔑が高まり続けている。この戦争にどのような立場を取るのか、それが、今後の各アラブ政府の存続の鍵となるだろう。

国家レベルでは、PLOのように反米を掲げて全面的なイラク支持を打ち出すことが困難でも、ヨルダンのように、米帝を非難する立場は強くなるだろう。早期停戦にもちこみ、帝国主義の介入を終わらせ、アラブの解決を実現していく方向は、追求されるだろう。この流れは、リビア、アルジェリア、イランなどが取っている。だが、国家政治レベルでの利益の差が、浮き上がってきている。

それは、エジプトのように、米帝との協調を軸に、アラブ反動産油諸国との関係を強めることによって延命しようとする立場に見られる。シリアは、サウジなどに派兵はしているが、戦争に巻き込まれないことを目的としている。ここにおいて、シリアとエジプトの利益の相違、延命戦略の相違が現われている。

焦点は、反植民地の立場から、米帝の影響力をいかに排除していくのかにかかっている。米帝は、イスラエルをおさえることで、影響力を拡大しようとしている。

総体として、戦局を見れば、イラクの抵抗が長期戦をめざしている分、アラブの側の流動を促進していくことになる。アラブ民族主義から見れば、イラクのクウェート併合は、正当性をもっている。アラブ人民から支持を受けているイラクを批判するのは、アラブにおいてはほとんど政権担当者のみである。そして、どの国の政権も、イラクの抵抗と人民レベルの強力な支持に対して、ガルフ後の中東の地図の中で、どのように延命するのかを模索している。特に、独自の発展を作ろうとしているリビア、イランなどは、ガルフ危機後に、帝国主義がさらなる介入と軍事圧力をかけてくるだろうことを見越している。

アラブの国家レベルでは、早期停戦、多国籍軍の撤退をかちとり、アラブ内の問題をアラブで解決していくアラブ・イニシアチブの形成が問われている。多国籍軍の存在自身が、他のアラブ諸国にとっても、危険なものである。それは、さらなる帝国主義の介入を意味しているからである。

三　シオニストの対応

シオニストは、イラクによるクウェート軍事併合―ガルフ危機を最大限に利用している。国連の期限切れを目前にした一四日、ファタハの保安長官の位置にあったアブ・イヤドと、その

片腕とされるアブラホールをチュニスで暗殺した。すでに暗殺されたファタハの軍事長官アブ・ジハードに続くこの暗殺は、アラファト議長率いるファタハのみならず、パレスチナ総体にとって、打撃である。右腕と左腕をもぎとられたことになっている。この暗殺は内部対立によるものと、イスラエルは宣伝しているが、こちらでのもっぱらの受け止め方は、モサドがやったものというのが支配的である。PFLPなどのパレスチナ組織は、イスラエル非難声明を発表している。なぜなら、イスラエル政府とモサドは、パレスチナ革命の解体のために、実力のある指導者の暗殺を一貫して計画しており、とりわけ、アブ・ジハード、アブ・イヤドは、アラファトに次ぐ暗殺リストの順位にある。前回のアブ・ジハード暗殺では、イスラエルがやったという証拠を残したが、今回はあたかも、ファタハ革命評議会（アブ・ニダール派）の仕業であるかのごとく見えるようにしている。しかし、パレスチナ人にとって、現在の状態の中では、現在敵対していたとしても、それが誰に有利になるのかを知っており、ファタハ革命評議会としても、手出しはしないであろう。これは、モサドの仕業そのものである。PLO主流のファタハは、これによって大きな打撃を受けている。

この戦争は、イスラエルにとっては、国内外のユダヤ人への宣伝を強化し、統合していく好機となっている。第一には、イラクがイスラエル攻撃を宣言しているので、戦争体制の口実をもって、イスラエル内での反アラブ排外主義を煽った。また、国際的にも、インティファーダ政策に批判的なユダヤ人の意見を押さえるのに、これ以上の宣伝材料はなかった。特に、イラクの化学兵器使用の危険性を煽り、いちはやくガス・マスクを配布するなど、戦争体制の名のもとに、一切の論議を封じ込めることに成功している。

第二は、インティファーダへの解体、弾圧策動の強化である。PLOとパレスチナ人民がイラク支持を打ち出していることから、期限切れを目前に、被占領地への完全封鎖と、外出禁止令をもって、すべての動きを止めさせた。

第三には、米帝との戦略同盟の強化を行ったことである。期限切れの直前から、米帝は国務省次官補率いるペンタゴン代表団を送り込み、イスラエルが参戦しないように押さえようとした。実際に宣言した通り、イラクがテルアビブ、ハイファ等を攻撃した後、これを利用して、イスラエルは、向こう五年間に三〇〇億ドルという援助を米帝からとりつけるのに成功したのである。この中には、通常の援助に加え、ソ連からの移民の入植援助も上乗せされている。イスラエルは、移民の大量受け入れで不足していた資金をも、米帝から取り付けるのに成功した。

また、防衛体制も、米軍の操作するパトリオット・ミサイル部隊が担当し、さらに米本土から空母が東地中海に急行してくることに決まった。

アラブ民族主義がみてきた通り、米の狙いは、石油とイスラエルの保護にあることが、こうしたいくつかの点でも暴露されている。

イスラエルに有利なこうした諸条件を、戦略的に包囲していくために、ますます、アラブ・イニシアチブの存在、インティファーダにおける指導勢力の統一と、長期的な闘争に向けた再組織化、および国際連帯の強化が問われている。

四　アラブ民族に敵対する日帝

米帝は、一日五億ドルという途方もない戦費を注ぎ込んで、イラク攻撃を開始した。この戦費には、死傷者や負傷者への措置は含まれていないだろうから、さらに戦費は高くなるということである。この資金を、さらに日帝からださせようと、日帝への圧力を強めた。

日帝自民党政府は、この要求に応じるべく、すでに決定している四〇億ドルに上乗せして、九〇億ドルを出すことを決定し、その負担を増税で賄おうとしている。人民に対して戦争への強制参加をさせようというものであり、人民にとって増税を受け入れる理由は一切ないものである。

次に、米帝から頼まれもしないのに、この機に乗じて、「難民救済のための」自衛隊機の派遣をも自民党が要求し、政府としてもそれを飲んだ。海部政権は、国民からの反対を予測して躊躇したが、自民党内の派閥の利益から、海部に対するゆさぶりを受けることになっている。言い分としては、民間機の戦域への派遣は望ましくないなどをあげているが、米帝自身ですら、

民間機を動員して軍事輸送にふりあてているのだから、まったく根拠足りえていない。

しかし、憲法と自衛隊法のなし崩し的拡大解釈によって、法制化による議会混乱を避けて、早急に成立させようと、政令方式を持ち出している。「国連平和協力法」が人民の攻撃から廃案に追い込まれたことへの巻返しとしてあり、人民の反戦の意志を踏み躙り、自衛隊派兵の一歩として展開しようとしている。

国際社会への貢献という観点から見たとき、多国籍軍への財政支援、自衛隊機の派遣による難民輸送は、最初から最後まで米帝支援であり、それ以外ではない。仏のように、和平解決のために、米帝とは異なる立場から、積極的に提案していくという行動は、一切見られない。自己の延命に向け、米帝に追随しつつ、軍事大国化を計ろうとしているにすぎない。

国際的な貢献は、和平努力に集中するべきである。この日帝の役割に対して、すでに駐日イラク大使は、「日本は、敵対的な態度をとったとみなす」との立場を表明した。これは、単に当事者イラクの立場ではなく、反植民地主義、反米の立場からイラクの立場を支持する全アラブ民衆の共通する立場であることを、日帝は捉える必要がある。こうした日帝の自衛隊派兵の策動は、国外の共同した反戦を求める人民の力によって阻止していくことが問われている。

五　国際的な反戦平和の要求

米帝ブッシュ政権は、軍事攻撃の正当性を強めるための時間をかけて、国連の撤退要求期限を口実に、イラク攻撃に踏み切った。この攻撃が開始される直前から、欧州全土では反戦要求が生まれてきたが、冷戦時代から軍縮運動を展開してきたあるイギリス人の発言が、ブッシュの欺瞞を暴露している。彼は、「南アフリカへの経済制裁には時間をかけたが、効果が上がらないから、軍事力を行使するべきとは、米も言わなかった。なぜ、今回は、急いで軍事力に訴えるのか？　経済制裁で継続するべき」と主張している。

米帝の狙いが、「クウェートの主権再確立、合法政権の復活」というきれいごとではないこと、これは、誰の目にも明確である。その狙いは、石油の帝国主義的権益防衛、支配という一言につきる。PFLP議長は、創立二三周年を記念する記者会見で、この問題について次のように指摘している。「米政府が、新しい世界秩序に何度も言及している。つまり、米が、国際的と地域の両レベルで、諸問題と運命を支配していくという体制を意味しているのである。アラビア半島征服は、米の世界政策の一部に位置すると考える。そこには、世界の石油埋蔵量の六六％が存在し、石油は、もはや重要ではあっても、単なるエネルギー源というにとどまらず、エネルギーそのもの、主要な種々の成長しつつある石油化学産業であり、国際金融の循環の支配を意味する。石油は、あらゆる意味で、現代世界の黄金である。米は、自らの支配的な地位を維持するために、アラビア半島を侵略した。石油を支配することによって、米政府は、中東の政治的、経済的運命を支配するのみならず、欧州、日本との激烈な競争の結果を決定できるのである」

アラブ民衆から見たとき、米帝も国連も、アラブ―イスラエル紛争において、一貫して、シオニストを支援し、擁護し続けてきた。米帝は、シオニストのパレスチナ人虐殺弾劾決議においてさえ、拒否権を発動し続けてきたし、パレスチナ問題に対して、何ら実効的な措置はとってこなかった。トルコによるキプロスの侵略・分割の際にも、経済制裁はかけず、撤退期限はつけず、撤退期限切れのあとの実力行使も合法化しなかったという事実との差異だけ鮮明になっている。

アラブ民衆の目でなくとも、この差異は歴然としている。クウェート防衛かそうでないかは、この事実が証明している。米帝の石油支配、これが、米帝のイラク攻撃の理由であり、だからこそ、アラブ民衆は、イラクを支持していくのである。

この簡単で明確な事実は、米国民自身、欧州の人々の目にも明確になりつつある。開戦以来、反戦、自国の軍隊を撤退させよという要求が、日を追うごとに高まり、米帝の最も恐れるベトナム症候群にまで成長する可能性がある。

そうした反米・反帝の国際的な連帯を作り出していくことが問われているし、盛り上がっている反戦運動が、「石油のために血を流すな」というスローガンを掲げていることに端的に示

されている。米帝と帝国主義同盟軍の軍事侵略に反対する行動が問われている。そして、アラブ自身の解決を支持していかなくてはならない。

資料

統一指導部アピール（全訳）

①アピール六五号　誓いと継続の呼びかけ

インティファーダは、帰還、民族自決、そして独立国家の樹立という人民の目的達成に向け、過去三年間の闘争と犠牲のうえに、これまで以上につき進み、より決意を固めて、四年目に入ろうとしている。人民の目的の土台である闘争と犠牲は、インティファーダを破産させようとか、または、少なくとも、インティファーダと共存しようとする敵シオニストの望みを打ち砕き、世界の諸民族、諸政府、国際機関の前に、現在と将来の現実を、大文字で再度示した。

日々、この紛争にとって、パレスチナ人の民族的、合法的諸権利を飛びこえた解決は存在しないという事実が確固としたものになっている。インティファーダは、紛争についてイスラエルがやっている虚偽の主張を打ち砕いた。同時に、闘争の合法性の事実をはっきりさせるとともに、新生のパレスチナ国家に対する国際的諸決議や、諸国家、政府の承認を勝ちとっている。そして、シオニスト存在を国際的な孤立に追い込むとともに、経済危機を悪化させた。

偉大なる大衆の皆さん。インティファーダを終息させようとする敵シオニストが繰り返し軍事的、政治的、経済的陰謀をしかけ、封鎖や、外出禁止や、飢餓攻撃政策を取ってきたにもかかわらず、パレスチナ人の怒りはガザで噴出している。ガザでは、通りや路地は、戦場と化し、独立の二周年を血の洗礼を受けた大衆的記念式典の場としている。

西岸のパレスチナ人民は、シオニストの暴力と剥出しの人種主義攻撃に対抗するべく、独自の英雄的、独創的、個人、集団レベルの勇敢な闘争形態を編み出して闘っている。大衆が展開するこうした英雄的行動は、元にもどることを拒否し、エルサレムをパレスチナ国の首都とみなし、パレスチナの国旗を自由と独立の象徴として抱擁するパレスチナ人民の鉄の意志を示すものである。

人類は多くの激変を経てきたが（最近では、ガルフ危機）、そうした激変はパレスチナ人の闘争過程に新たな責任を負わせるものであり、情勢を複雑にし、我々の重大な財政資源を奪い、ガルフ危機に関する国連安保理の諸決議に端的に示されるような新たな国際的均衡などを作り出し、パレスチナ人民をして、不退転の抵抗を堅持し、インティファーダを発展させ、過去数ヵ月の経験が示すように、あらゆる可能な闘争形態を駆使して、インティファーダがより高次の段階に到達するよう闘う決意を固めさせている。なぜなら、パレスチナ人大衆は、圧力を受ければ受けるほど、勝利まで闘いぬく決意を固めるからである。

インティファーダの勇敢な大衆の皆さん。蜂起が四年目に入るにあたり、パレスチナ、アラブ、国際レベルでより困難な、かつ複雑な任務を果たそうとしていることを胆に銘じなくてはならない。パレスチナ内外で、闘争の位置を強化、発展させることが要求されている。焦眉のユダヤ人移民問題、そして激化するシオニストの人種主義攻撃、帝国主義とシオニズムの戦略的利益の防衛に乗りこんできた欧米、アラブ反動の恫喝に対決するために、パレスチナ人民、アラブの人民勢力の主体的要素により依拠していかなくてはならない。つまり、奴らは、アラブ地域における人間的、文明的、科学的、民族解放的、進歩的なものすべてを破壊し、人民の合法的かつ歴史的諸権利の剥脱に来たのである。

被占領地、レバノン、シリア、ガルフ諸国のパレスチナ人民大衆は、三国同盟の最も厳しく、危険である攻撃に直面している。そこで、こうした新情勢を検討し、明確な軍事計画を土台にした民族力量と資源の限界、再配分、補完を検討するために、PNC（パレスチナ国民会議）の開催を含め、パレスチナの重大な対応を決めることが肝要である。その意味で、ガルフにおける外国の、またアラブ反動の恫喝と介入に対峙しているアラブ人民と、パレスチナ人が断固

ともに闘う立場であることを確認する。したがって、我々は、テロリスト・ブッシュの中東訪問と、空母や戦車による力の誇示を弾劾する。また、ハーフェズ・アサドがジュネーブでファシスト独裁者のブッシュと会談したことを、断固弾劾する。シリア政府は、米のカードを使うことを止め、ガルフから軍隊を退き、レバノンにおいてパレスチナ革命とレバノンの民族運動を攻撃しようとしているのを止めるよう呼びかける。

さらに、民族統一指導部は（以下、統一指導部と略）国際社会に呼びかける。パレスチナ人大衆、彼らの財産と聖なるモスクを防衛しよう。そして、国際社会とソ連に呼びかける。シオニストのファシスト傾向を助長し、シオニストの立場強化を促進しているユダヤ人の移民を止めさせよう。同時に、PLOと、アラブ、およびイスラムの解放運動に呼びかける。アラブ民族総体と人類の安全を脅かす破滅的な危険性と対峙するための人民会議を開催しよう。

また、クリスマスを迎えるにあたり、統一指導部はローマ法王に呼びかける。パレスチナ人のために祈り、パレスチナ人の帰還、民族自決、パレスチナの地にパレスチナ独立国を建設する権利を支持しよう。

シオニストに囚われている獄中者の皆さんに呼びかける。隊伍を整え、すべての種類の差異と不団結を拒否し、拘留センターを団結とインティファーダの真の学校に変えよう。監獄や拘留センター内の軍事委員会に呼びかける。額の高低に関わりなく、いかなる罰金の支払いも拒否し、この決定を守るように獄中の兄弟や同志に呼びかけよう。

大衆の皆さんに呼びかける。被占領地では、多くの呼び名をもつ人々の名前を含むリストをつけた偏見に満ちた声明が配布されているが、これらを無視しよう。それらの名前は裏切り者として名の知れた者や、正直者とされる人々を含み、実際にはリストに載った人々をまったくそのようなリストを発行する政策を取っていない知らない人間が署名している。統一指導部は、いし、必要な場合は、適正な方法で対処するだろう。

労働レベルに関して、雇用主の皆さんに呼びかける。生産ラインを増大し、失業者、磁気身分証保持者を可能なかぎり雇用しよう。GUW（労働総同盟）に呼びかける。この呼びかけの実行状況をフォローしよう。また、大衆の皆さんに呼びかける。協同組合を結成したり、集団的な、また、家族の力を合わせるなどして農業に携わり、パレスチナの大地に植え付けを行おう。未解決な諸問題を抱える皆さん、特に、ジェニーン近くのアルボナ地区の皆さんに呼びかける。四年目に入るインティファーダに全力を向けるよう、それらの問題を解決しよう。そのために、すべての人民諸機関の代表の皆さんに呼びかける。民族権威の確立と、その諸機関と施設の建設を土台とする新しい年の闘争計画を立案しよう。パレスチナの諸大学に呼びかける。シオニスト当局から有罪判決を受け、グリーン・カード（編註・イスラエル内の労働禁止対象者）を保持している学生を入学させよう。

ドルーズ行動委員会とゴラン高原のドルーズの兄弟に感謝するとともに、敵シオニストに対する闘争の団結を強調する。同時に、シーク・アミン・タリフ（パレスチナのドルーズ派のゴッド・ファーザー）に呼びかける。遅くならないうちに、被占領地の兵役にドルーズがつかないように指示を出そう。

インティファーダが四年目を迎えるにあたり、PLOの軍事的一翼である統一指導部は、パレスチナの殉教者、負傷者、追放された皆さんに、称賛の立場を表明する。そして、インティファーダの四年目は、勝利の年であり、パレスチナの大地にパレスチナ国を実体化させる年であることを念頭に置き、闘争を堅持することを誓う。また、何処の地にあろうとも、パレスチナ人のすべての皆さんに対して、PFLP（パレスチナ解放人民戦線）の創立二三周年をお祝いする。PFLPが果たしてきた傑出した役割を高く評価し、PFLPのハバシュ議長に特別のあいさつを送り、インティファーダと革命を勝利させるまで闘うことを誓う。

インティファーダが四年目に入ろうとしている現在、最高度の意識性を持ち、隊伍を整え、インティファーダの軍事的選択を確立しよう。シオニストが仕掛けてくる新たな抑圧的諸措置と闘い、エルサレムをパレスチナの真の首都にしよう。すべての政治的陰謀を打ち砕き、すべての場所における人民の団結を実現し、アラブ

人民との戦闘的絆を強化し、地域、国際レベルでの地位を高めよう。我々には闘争を継続して勝利する以外、反動－帝国主義－シオニストの陰謀を打ち砕く以外、他に道がないのでパレスチナの主体的要素を強化しよう。

被占領地の大衆の皆さん、特に、ガザの英雄の皆さん、国外に追い散らされた皆さん、四八年の被占領地の皆さんに、ヨルダン、ゴラン高原、およびレバノンに在住の皆さんにあいさつを送る。パレスチナ内部、そしてレバノンで決死闘争を貫徹した英雄の皆さん、そして、パレスチナとエジプトの英雄であるエジプトの兵士にあいさつを送る。シオニスト、帝国主義者、そして、アラブにおける奴らの僕どもに屈辱を。

最後に、大衆の皆さん、以下の活動を実行しよう。

・一二月一日から七日までは、あらゆる形態の闘争を強化する日。インティファーダが四周年を迎えるのを祝い、祭り、人民集会、大衆デモをやろう。

・一二月八日と九日は、アル・アクサの虐殺二ヵ月にあたるのと、インティファーダが四年目に入るので、これらを記念するゼネストの日。インティファーダ強化・拡大と民族的団結の転換点にしよう。路地委員会や農業委員会を結成しよう。

・一二月一〇日は、パレスチナの旗の日。パレスチナ旗を掲げ、朝一一時一五分から一五分間、交通を止めよう。

・一二月一一日と一二日は、入植者ギャングどもへの闘争強化の日。PFLP創立二三周年を記念し、祭りや人民的式典をやろう。

・一二月一二日から二〇日までは、パレスチナ内外で、パレスチナの活動を展開する。アラブ大衆の皆さんに呼びかける。パレスチナ人の闘争を支援し、帰還、民族自決、独立国家樹立のパレスチナ人の諸権利を確認し、ユダヤ人の移民を止めさせ、ガルフに対する帝国主義の侵略を拒否することを確認し、国際社会に対してパレスチナ人を保護するよう、要求しよう。

・一二月二五日から二八日は、エルサレムのユダヤ化に抗議し、ユダヤ人の移民、入植、シオニストの新省設置、新警察部隊、特にエルサレム配備の警察新部隊に抗議し、ゼネストをやろう。

・一二月二二日から二九日までは、獄中者、被拘留の皆さんと団結する闘争の日。パレスチナに親戚がない被拘留者との面会を組織し、そうした人々の名簿を赤十字本部からもらおう。また、この期間は、家庭農業と生産を振興し、すべての場所で人民委員会を組織しよう。

・すべての商店は、一二月七日、一六日、二〇日、二一日は、二四時間営業しよう。

・学校、教育施設、大学は、一二月四日と一二日に、パレスチナの大義とインティファーダの意義を説明する第一回目のコースを設置し、多くの民族的、文化的活動を行い、緊急医療訓練を行おう。学生の皆さんに呼びかける。統一指導部が呼びかけたゼネストの日でない限り授業時間を遵守しよう。この実行を監督するのは、高等学生評議会の義務である。

・監獄と現場活動に関して、ファタハが統一指導部を代表してハマスと調印した合意の遵守の必要性を強調する。

英雄的インティファーダ万歳　　PLO万歳
殉教者に栄光と不滅の生命を　　革命堅持
一九九〇年一二月一日　　統一指導部
パレスチナ国にて

②アピール六六号　建設と挑戦の年の呼びかけ

聖なるインティファーダを闘う人民大衆の皆さん。権利と平和のために闘う戦士の皆さん。占領に対する伝説的なレジスタンスが堅持され、パレスチナ独立国のすべての通りと路地で敵ファシストの足下の大地を焼き、すべての前線でインティファーダが敵と対決し、国際世論の支持を新たにさらに勝ち取り、国際外交の分野でも成功を収め、敵の虚偽の主張をさらに暴露し、敵をさらに政治的・経済的に複雑な状況に追い詰めている時、まさにこの時、皆さんは、統一と、自由と独立のためにさらなる犠牲を払っている。心理的、経済的圧力は、皆さんの肩にさらに重くのしかかり、さらに多くの人が殺され負傷させられ、占領当局の牢獄は我々の戦士でひしめき、追い詰められた敵どもは戦士の家族を国外追放し、飢餓と貧困の妖怪が皆さんを脅迫し始め、敵シオニストとシオニスト極右への皆さんの憤怒は拡大している。

インティファーダが、広範な支持を受けていること、そして、統一魂、兄弟愛、内部の関係においては統合され、敵との対決における大衆的不服従戦術を駆使していることに代表される強力な参加を特徴としていることは、特筆すべきである。だからこそ、比類のない成功、国際レベルでの称賛と支持を勝ち取り、占領当局を烈火のごとく怒らせ、敵の戦争機械の有効性と実行力をにぶらせている。そこで、敵は、インティファーダのイメージを汚し、インティファーダから大衆的性格を抜きさり、あたかもインティファーダが少数の個人やグループだけの仕業であるかのようなデマをふりまこうとして、さらに新たなあの手この手の陰謀を画策しなくてはならなくなっている。そして、インティファーダを壊滅させる第一歩として、その少数なる者を摘発し、インティファーダへの大衆的支持を弱め、世界的支持をなくそうとしているのである。

敵はこうした策動を仕掛けているのだが、過去の策動を皆さんの石と意志が打ち砕いたように、こうした策動も、新たな弾圧も、打ち砕かれる運命にある。奴らの最後の手は、ガザから四人の活動家を追放し、エルサレム－ヘブロン街道上で平和的なパレスチナ人家族を待ち伏せ攻撃し、パレスチナ人町長数人の暗殺を企てたテロリストを釈放して報奨することだった。

それにもかかわらず、インティファーダの責任を引き受ける大衆の皆さんは、インティファーダの真の主体、建設者、決定的武器の位置にある。集団的戦闘行為と強固な意志によって次々と勝利を収め、火器は持たないが、頭から爪先まで統一と英雄的意志によって武装した皆さん、決起と不服従の皆さん、ストとデモで闘う皆さん、聖なる石と燃えるタイヤで闘う皆さん、独立国建設の主体の皆さん、皆さんにかかっては、敵のロケットも何の役にも立たず、敵の強さも弱さと恐怖に変えられてしまう。

栄光と独立の建設の旗手の皆さん、パレスチナ独立国の創造主の皆さん。新しい記録を打ちたて、自由と独立の道に足跡を残すよう、皆さんの努力を統一しようではないか。その道程は、殉教者の流した血を吸い、世界中の被抑圧者、苦しむ者たちの痛苦で彩られている。世界中の人民の皆さんに、殺害政策も、飢餓政策も、追放政策も、インティファーダを流産させることは不可能だということを知らしめよう。そして、民族統一指導部（以下、統一指導部と略）は、この聖なる道程をどのように辿るのかについて、以下を指摘する。

攻撃部隊の皆さんに呼びかける。活動を統一し、被占領パレスチナ国における敵と、敵の車輛、財産を集中的に攻撃し、我々が解放した諸村と諸地区の防衛にむけ激戦を展開し、パレスチナ国の独立地域を確立し、拡大しよう。人民委員会再建に関連した皆さんに呼びかける。生活の種々の有用な側面において、民族的権威をもつ構造を建設する活動をやろう。インティファーダの四年目の闘いのスローガンを、民族的権威構造の確立とし、この責任を全員が担い切ろう。

事態を明確にするために、統一指導部は以下を明らかにする。ガザにおけるスウェーデン人看護婦への襲撃、また、ベツレヘムの僧院への焼き討ちは、PLOの名をかたったものである。パレスチナの人民と正義の大義のイメージを汚そうとするすべての裏切り者とよそ者に対して、大変断固とした対応をするつもりであると警告する。そして、いかなる組織に属していようとも、被疑者がパレスチナの最高機関の判決を受けてもいないのに、被疑者を処刑、殺害した者の全員に警告する。この命令を守らない者は、すべて、パレスチナ国の法律に違反したとみなされ、厳罰に処せられることを明確にしておく。また、治安機関の全員に要求する。被疑者、とりわけ武装している者、土地と財産仲買い人に関して、ふさわしい措置を取るために、必要な報告書を準備しよう。

さらに、ストを呼びかけ、民族主義者勢力に呼びかける。パレスチナ市民に不当な取り扱いをしないようにしよう。大衆は、我々を導く羅針盤であり、民族主義勢力の路線を決定する位置にあるからである。むしろ、大衆と民族主義勢力との間に、信頼の絆と相互尊重関係を建設するよう呼びかける。いかなる理由によるものであろうとも、覆面使用を当面控えるという禁止を、今回再確認する。

統一指導部は、クランの有力者、そして、すべての場所で良いことや改革のために働く人々に呼びかける。矛盾や紛争の解決に向けた努力を強化しよう。また、問題のある地区で、問題

の当事者となっている人々に呼びかける。そうした紛争が政治的次元にまで悪化するのを阻止しよう。

占領当局が仕掛けてきた経済戦争に対応し、特にグリーン・カード保持者に仕掛けられている戦争への対応として、会社や個人的施設の所有者の皆さんに呼びかける。少なくとも、臨時雇いであっても、彼らを雇用するための適正な方法を見付けだそう。また、金融機関に呼びかける。彼らのための共同組合設立や、個人的な小さな仕事を始めることに対して貸付けの優先権を与え、彼ら本人とその家族には、無料の医療、教育を与えよう。GUW（労働総同盟）に呼びかける。彼らを支援する賢明な計画を立てよう。後日、グリーン・カード保持者飢餓化政策に対決する完全な計画を統一指導部は立案する予定であることを、特に明確にしておきたい。そして、皆さんに対して呼びかける。果樹を植え、季節の穀物の作付けをするために、大地に戻ろう。クウェートから出てきたパレスチナ人の皆さんに呼びかける。皆さんと、パンを半分に分けて食べることを約束する。工場主の皆さんに呼びかける。人民の条件に見合うように、生産物の価格を下げるとともに、品質を向上させ、イスラエル製品ボイコットを否定的に利用しないようにしよう。

民族的に有名な個々人がカンパを集めているが、統一指導部は、カンパ活動禁止の指令を再確認する。攻撃部隊の皆さんは、こうした恐喝の手段に訴える者が誰であれ、処断するようにしよう。

攻撃部隊の皆さんに呼びかける。パレスチナ製で間に合うものについては、イスラエル製品を禁止する指令を維持しよう。特に、エルサレムの商人は、この問題について徹底していないので、警告する。なかでも、イスラエル製、または、パレスチナで生産されている外国会社のタバコ、特にティノバ社製、そして、清涼飲料水、全種類のビスケットの取り扱いを禁止する。今月、これらの品物を並べている商店は、処罰の対象であることを宣言する。

公立学校の教員の皆さんにあいさつと称賛を送る。皆さんは、学校閉鎖期間の賃金支払いを受けられないなどの弾圧を受けつつ、教育任務を果たしぬいた。同時に、責任感をもって、大学や学校の教育課程に対する種々の分断策動をはねのけ、対峙するよう要請する。この機会に大学や教育施設に要求する。グリーン・カード保持者をできるだけ多数入学させよう。

獄中者、拘留センターの兄弟、同志たちを称賛し、罰金支払い禁止指令を守りぬいたことに感謝する。パレスチナの皆さんに宣言する。インティファーダの獄中者は、我々を導く松明である。獄中者の皆さん、我々は皆さんが開始した闘争を堅持し続けるし、監獄の鉄棒にも、鉄条網にも、皆さんとの交信を妨げさせないことを誓う。そして、赤十字社と他の関連国際諸機関に要求する。獄中者と被拘留者、特に長期の病に苦しむ人々、なかでも、がんのイマド・アル・カルディと、失明し手もなくなったモハムード・アブ・グルラーの釈放実現に介入してほしい。

国連安保理に呼びかける。パレスチナ国市民に国際的保護を与える問題での態度を発展させ、パレスチナ国の領土からのイスラエル軍撤退を保障する国際会議開催に向け活動してほしい。この問題については、統一指導部は、帝国主義が果たしている役割を弾劾するとともに、非同盟諸国が重要な内容で提案した国連安保理決議案を葬り去った米政府の政策を弾劾する。

国際社会に呼びかける。パレスチナ人民を保護し、また、パレスチナ人民が暫定的な国際的保護を必要としていることを宣言しよう。

祝福されたクリスマスにあたり、統一指導部は、種々の宗派のキリスト教徒の兄弟たちにあいさつを送る。また、一月一日は、パレスチナ革命開始であるエイラブーン革命、そして、キャラバンの殉教者、自由実現の意志、そして、銃とレジスタンスの記念日にあたるので、パレスチナ革命の指導者で象徴であるアブ・アンマル率いるファタハのすべての組織員、カードル、中央委員会に対して、ともに、闘争の道を、勝利するまで闘い続けることを誓う。パレスチナ人民の偉大な息子たちよ。帝国主義の陰謀がアラブ主義の心臓であるバグダッドを攻撃しようとしている時、そして、真のアラブの独立計画を挫折させるべく、多数の侵略軍が成長しつつあるイラクの軍事・経済的潜在能力を破壊する準備を進めている時、まさにこの時、パレスチナ人民は、手遅れになる前に、この不正な戦争

から撤退するようシリアとエジプトに呼びかける。歴史の判決は大変厳しく、人々は決して許さないだろう。また、以下の大衆的活動計画にしたがって、アラブ世界の西部戦線での英雄的戦闘の継続の必要性を強調する。

(1)　一二月三一日　すべての場所で、大衆的デモをやらなくてはならない。夜の八時に、パレスチナ国の山々の頂上と家々の屋上に、松明を灯そう。

(2)　一九九一年一月一日は、集中的闘争強化の日。封鎖と外出禁止令を打ち破る。

(3)　一月五日、一一日、二五日は、商店は二四時間営業としよう。

(4)　ゼネストの日は以下である。インティファーダが三八ヵ月目に入るのを記念する一月九日。ガルフ地域における帝国主義軍隊の存在に抗議し、開戦となった時に占領当局がパレスチナ人民に抑圧措置をとらないよう警告する一月二五日。パレスチナへのユダヤ人移民増大に抗議する一月二六日。これに関連しては、在外パレスチナ人の皆さんは、ソ連大使館に対して、大量移民抗議と移民中止を要求してデモをしよう。また、ベツレヘム地区住民の要求を受けたので、一月六日をベツレヘムのゼネストの日とする。

(5)　パレスチナ国の各地の民族主義勢力に呼びかける。闘争活動週を、それぞれの条件に合わせて計画し、決定しよう。闘争活動週には、婦人の座りこみを行い、グリーン・カード保持者に連帯し、かつ追放政策に抗議して、国際機関へ抗議の電報を打とう。

(6)　今月は、民族機関を侵している諸問題を解決する月とする。特に、ジェニーン近くのアルバナ、セイレト－ハルシーエ、ラマッラー近くのサファ村、その他では、そうした性格の諸問題が大きくなっている。これらの地区の人々に呼びかける。改革委員会と民族的決定に応えよう。大変複雑な事件に対して決定を下す権限を帯びた最高司法所が存在すること、また、完全な司法体系を創るべく努力中であることを、統一指導部は発表する。

(7)　一月一二日、一三日、一四日は、戦争抗議のデモの日々としよう。

インティファーダ万歳　　PLO万歳
殉教者に栄光と不滅の生命を　　革命は勝利まで、勝利まで、勝利まで闘う
統一指導部
パレスチナ国にて
一二月三一日

重要日誌

一九九〇年一二月一一日～
一九九一年一月一八日

一二月一一日（火）
・シャミール－ブッシュ会見後、シャミール曰く「米はイスラエルを犠牲にしては行動しないとの確認を行った」
一二月一二日（水）
・アルジェリア大統領、バグダッド訪問。
・ヤーファで、ユダヤ人3人刺殺。以降、イスラエルはハマス狩り、死刑復活論議、報復活動強化。
一二月一四日（金）
・西岸、ガザでハマス容疑者が多数検挙され、四人（全員ガザ出身）に追放令処分。
一二月一六日（日）
・シリア－アルジェリア共同声明発表。イラクに撤退を呼びかけ。
一二月一七日（月）
・イラン海軍演習開始。
・ヨルダン首相、シリア訪問し、ガルフ有事の連携を確認。
一二月一八日（火）
・四人追放令に抗議して、被占領軍とパレスチナ人衝突。一九人が負傷。
一二月二三日（日）
・フセイン大統領、「戦争になれば、最初にイスラエルを攻撃する」と宣言。
一二月二五日（火）
・GCCサミット終了。イランとの関係改善を打ち出す。
一二月二七日（木）
・イラク情報相会見で、情勢に対する米の側の動きに応じる用意ありと語る。
・イスラエル、レバノン南部で四ヵ村砲撃。
一二月二九日（土）
・ガザで、四人が占領軍に殺される。
一二月三〇日（日）
・イラク国防相、戦争体制完了を宣言。

・サウジ、米副大統領に対し、多国籍軍への財政支援増大を約束。
・イラン、ガルフ有事の中立を宣言。
一二月三一日（月）
・被占領地でアピール六六号発表。
一月一日（火）武装闘争開始二七周年
・被占領地全土封鎖を打ち破り、各地で衝突。西岸で、二名が射殺される。
・フセイン大統領、クウェート前線視察。
一月二日（水）
・リビアのミスラタで、リビア、シリア、エジプト、スーダン首脳会談。イラクの撤退を呼びかけ。
・ベーカー、連合国諸国歴訪予定を発表。
・仏国会外交問題委員長、イラク訪問。
一月三日（木）
・国連総会議長、ガザ視察。占領軍とパレスチナ人衝突。一名が殺され、多数負傷。
一月五日（土）
・イスラエルのヘリ、ヒズボッラー拠点を銃撃。
一月九日（水）蜂起、三八ヵ月目に入る
・ジュネーブで、イラク－米外相会談決裂。イラク外相、ブッシュ書簡を突き返す。
・イスラエル、ハマス指導者容疑の四人をレバノンに追放。
・被占領地で、イスラミック・ジハードが闘争強化呼びかけの声明発表。
一月一一日（金）
・米議会両院、ブッシュの実力行使支持。
・ペンタゴン、国務省次官を団長とする使節をイスラエルに派遣。
・ベーカー、カイロとダマスカス訪問。
一月一三日（日）
・フセイン大統領－国連事務総長会談決裂。
一月一五日（火）
・チュニスで、ファタハのアブ・イヤドら三人暗殺。
一月一六日（水）
・国連期限切れ。安保理、夜中まで仏提案、英対案討議。総長の最後の呼びかけに委ねることに決定。
一月一七日（木）米帝、イラク攻撃し、戦争開始
・キューバのみ、米非難、即時停戦呼びかけ。
・フセイン大統領、ラジオ演説で、侵略に対して抵抗すると語る。
一月一八日（金）
・イラク、イスラエルへのスカッド・ミサイル攻撃第一回。
・米、英、ソ連、イスラエルに抑制を要請。
・海部政権、自衛隊機の派遣打ち出す。

編集後記

・南部レバノンでは、米帝のイラク攻撃が開始されて以来、イスラエルがいつ侵略してくるかと、特にピリピリしている。だが、人々は、スカッド・ミサイルがイスラエルに打ち込まれる度に、歓声を上げる。ラジオを離さず、話題は、いかにサッダムが米帝を手玉にとったかに集中する。
・被占領地でも、パレスチナ人民は、制空権を奪ったはずの米軍のパトリオット・ミサイルを出し抜いてテルアビブやハイファに着弾するスカッドを見守っている。尾を引くミサイルが着弾するたびに、歓声が上がっている。スカッドが打ち込まれるたびに、サッダム支持率が上がる。
・イスラエルが侵略してくるだろうこと、また、イラクによる攻撃に対して、イスラエルは躊躇なくレバノンにも化学兵器をも繰りだすだろうことを予測して、したたかな業者が毒ガス・マスクのTV宣伝を始めた。女性のデモンストレーターがうまく操作できないで、息が詰まりかけて目を白黒させる場面などもあった。
・レバノン、パレスチナ人民は、「クウェートの主権」とか、「クウェートの防衛」とかの米帝の言い分には騙されない。誰が帝国主義の笠を借りて、石油の富を独占してきたか、帝国主義の軍隊を導入したか、イスラエルを扶けているか、身に沁みて叩き込まれている。なによりも、占領された自分たちの村、町、掠奪された民族の富をとりもどしたいのが、サッダムを支持する根拠である。